

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 フォーラム山形のロビーにて上映中の映画について笑顔で語る長澤代表。この時ばかりは、映画を愛する一個人。上映作品の幅の広さが物語るように客層もさまざま。世代を超えて支持されている。

2 1986年フォーラム開設2周年で講演をお願いした淀川長治氏(左)と長澤代表。偉大な映画評論家との貴重な一枚。淀川氏はフォーラムを「いい映画館だ」と賞賛し、後日映画雑誌でも触れてくれたという。

3 フランス映画の名作「男と女」に出演し、主題歌を歌ったピエール・バルー(前列・左から2番目)の来日に合わせて山形に招聘した際、ボランティアメンバーとの記念撮影。長澤代表は前列・右から3番目。

「映画ファンが喜ぶ作品を上映したい」を原点に日本初の市民出資による映画館を設立。

長澤裕二 フォーラムネットワーク 代表

「こうなったら自分で映画館をつくるしかない」そう思い立ったのは大学時代。学業もさることながら、大学へはサークル活動を楽しみに入学したという長澤さんは、グライダー部、写真部を経て、映画サークルを立ち上げた。映画好きの仲間たちと自主上映会を催すなど活動は楽しかったが、当時、地元の映画館では長澤さんたちが見たいと思う社会派・芸術系の作品は滅多に上映されることはなく、自主上映もままならなかった。その不自由さが、映画館設立という夢の原動力になったのだ。工学部で精密工学を専攻したにもかかわらず、選んだ就職先は仙台市の映画館。4年間勤めて映画館経営のノウハウを学び、計画に着手するために山形に帰ってきた。ノウハウの

次は仲間づくり。映画好きの同志を少しずつ増やし、年会費を集めては、自分たちが見たい映画を上映するスタイルを定着させていった。

「本当に見たい映画を上映したい」その一心で目指したゼロからの映画館設立。仲間たちの間では建物や設備は最低限のものでいいから、上映する映画の質だけはこだわろうという意見が大半だった。しかし、長澤さんは居心地のいい空間、座り心地のいいイスにこだわった。イスが硬い、トイレが臭う等の不快感があっては観客は映画の世界に没頭できないというのだ。もちろん、もっとも気を遣ったのは上映映画の選択。商業的な人気作品と両立させることで、収益性の低い社会派・芸術系作品の上映を

根づかせる計画だ。資金調達等に苦勞しながらも、1984年7月に日本初の市民共同出資による映画館「フォーラム」が誕生した。

つねに良質な映画を選択、上映することで得たお客様からの信頼が新たな顧客を呼び、今やフォーラムは東北と北関東の7都市に展開する「フォーラムネットワーク」に成長。それでも、「自分たちの見たい映画を上映しよう」というスタンスは決して揺るがない。映画という文化を通して、本学の先生や学生との接点も少なくない。特に、映画館でのアルバイトには大学生を多く採用しており、上映映画は無制限に鑑賞できる特典付き。ここにも良質な映画にたくさん触れて欲しいという長澤代表の思いが表れている。

不屈の成果